新宮圖書

へ 5
1874
2

千代尼句選

武江　杉折下葉詢行

秋の部

立秋

見出しては手にも見えぬ初の秋

萩の葉の物いふ風も今朝の秋

琴の音の家に通ふも今朝の秋

秋立つや見えて昔の噂もある句

初秋や来る身にしみし其色

饗庭文庫
斎藤文庫
へ5

文月

初秋やまだ何ゝれ然ゝ袖の色

蝉なけや風にのゝ哀も定し

蝉の形ぐ出て見るゝ白き月の形

朝顔の露に染て持る露の形

萩の葉の持る露も星の数まで持る

初ゝ秋のゆふきゝ月

文月や空にまつ〳〵見えしゆり

文月の夕ぐれに散る一葉かな

七夕

萩も稲も一露や星の数なり

星合や人しれずして今宵かな

かゝる夜も星の袖に橋かけ給ふも

朝顔や星の夕の露にて白

宿白にも露る夜ゝのゝ星の数

星合や月の光も何の数

うきまきの糸ものまきの影の数

鵜舟

鵜の首や夜さの火の影の数かり

絹白や帰りくるまきしく候
何まへ様帰りて物事出来候
新白の幸の嬉しさ余りも御はなし
新白の衣や木綿なとしき
何まへ様の香は御道具右まての庵
新白や御新しく結ひ申候
新白や来る人にも人まいらせ
何まいる国や稲葉にも茶御出し

稲妻

茶の花

新白の色に茶外黄なる秋紅も多候
新白の花や衣に秋まゐらせ申候
絹白の中津の人々にも出しかね
稲妻も稲荷の方へよろしく
以外一まゐや候ふ参るし成津けまいらせ
稲津の外に稲を好み候やうの新しく
よろ敷候も善きる様にも茶の花
茶外にや御文にも参らせ候あるまじく候

河内にて

虫聲

千草哉咲むすびし色の草ならし

鮮あかき色さへ夜の露に寒

聴しおもふ上声ゆる虫のあはれ

緑女

足遠き身に関のあなたの虫のあはれ

門前の夏草に残り音の虫の声

尾花

鮮風のなびきまねける尾花かな

晩鐘も聞ゆる流れ月のあはれ

西鶴

蘭

まじはりに薫る葉の蘭の香

桔梗

桔梗に秋の咲きしそめしは峯の寺

萱

叩く萱の葉に露の石清水

鶏頭

鶏頭の色あかく物にすぐれる

秋のとて朱の深く物に人の粧ひ

萩

花咲の錦に人の心萩の原

夕蓋のらく会

芦穂　よし悔しの梅に咲る花は二百人なり

鉄風　木々稲の声をりや鉄の風

むらし　虫の音中に石も出す渡り探る水

新しの音や雉子の飾りて庭の月

きりす　月の夜や石に出て鳴りきりきりす

従ちの花五色の峰やきりきり

靖蛉　行く年にめぐる新しきなれなり

千種園の題にて

秋の海　浪の音に鉄の咲乱りにきらき風

宮荻　明月や人に出し合ふ名月の影

明月や吉雅の桑にも咲きまり

名月や行くもしく舎にみの雲

明月や天地る年に浮もる夜の音

明月やきへしの者明りきかり

名月や雨雲にも似た水の音

照鏡に耳ノ写し形丸やふ女に自
明自や国年おまし左をて淡歩か

虫類

きぬしるゝ自ゟも何りて明道しと
明自やまとゝ人形ゟ何しきん
形ふ恩ゟ子耳ノゟ形る自りゟ形
右自や高も縁えゝ形店ゟきゟ次
自えふも新ゆしゝや女子連

明自やかきとまのねるるも何り
人中出海る新形まし自ゟゟ形
明自形ゝ女や何形ゟ出ゝ乃る
女ゟゟ方き出し何形ふ自足ゝ形
明自や何ゟる人物年り何女り
右自やとまゝ形き次ふに形福
ふゝ町形ゟかまし明るし年る形自
明自やに方ゟ形自明ゟゟか

ゆふきりにたゝぬ程もあるかなの月

硯水鏡山

明月やきのふもけふも見る硯

石山画賛

名月や雲路をわけて名の青

十六夜

十六夜や今何見えし寝るまの声

十六夜や呼人もなし夜もすがら

いざよひや十六夜とはいはぬなり

十六夜は昨日に替る空や芋の露

十六夜の影や袖にも人も何り

初雁

初雁や連りくるゝ筆の跡

初かりや雲くるゝ空の夜の雁

きのかりや心に解れ六舟の次

きのかりや筆何る物をもとめ盤

きの雁やしかしなき筆のまき

鶉

鶉人の目の色見えぬ小ぐれかな

蒲萄茶

萎れても紫残りて色ある物
縫物に針の目ゆるく綾る絹
帝の御香も好る朽葉の色ある
葉の香に浮ふ色あはし菊の色
きく畑やしらふ見に見ゆる菊の花
きくも残りてあはれに菊の香
菊咲て余所の事ハ葉に隠る物
白きぞや紅さしそへ黄菊白菊

菊はなこゝろのまゝに紫かゝり
きく畑やしるしの葉と菊色ある
菊の香や葉に抑含る黄色なり
朝の露ふりかけ紫の葉の色
浪菊や色ある葉にうつりたる
うつろひてさかりもすぎ葉の色
紫の色やうつりかはる色
今日の朝の露の菊の花

庭前月

ことしの菊の盛りに咲て面白けり
白菊や手に咲てこそ八嶋も似合
手作りに乃秋の色かりや菊の花
新宅も出来にけり庭の月
此の殊更娯も嬉しき秋の月
庭の月花も見すに晴れける晩
とりわけ庭の秋の空や庭の月
立待の月も秋の夜の東山に出る月

山寺の霄月に見しや後の月

藤袴

藤袴やしほにふくれて匂ひしき

秋風

夕日の影の尾花の秋風の色
見やり葉に風の音に昼の庵

鶉

乃浮の鶉も草の原の庵かな

三界唯心

出生や浮世の事の有る身哉

一鉢の庵にて

九十九銭金の手に持つる飯かな
飛人数の銭術しものを 稼ぐ嫌

而菓

來かゝる出て身の為そ而菓に成
名高銭もあるに何のて而菓に念
[illegible]

鉄子

名まへ[illegible]

茂

而の色志の成りけやし 秣の笑
名ゑれを[illegible]
[illegible]

山家 温泉

温泉の山や[illegible]
青[illegible]
[illegible]

好の名

砧

かゝし

成るゑ

鴫

止吾

鴫たつや夕浪の影の春のくれ

草花

聲きゝの夕も鴫の汐の満あり

行鴈

行柿やも音きく風ハ吹きおくる

津る鴈やひとり有明の松の華

初時鳥

素秋

憚きしてまだ物なき聲のしるしれ

梅の木も常にしりしらぬ雅

今朝の跡ふ追ふ雲や声の聲なれ

聲の跡が恋の雲遊り初時鳥

初しのれ風も物なれ深き通りありり

まきの荒の道に聲あり初時鳥

京へ出て月やあの雲や初時鳥

時雨

田舎も京の地に落るや初時雨

まがきの河しき雲雁が時雨かな

衣の袖の背に降りてしぐるゝかな

松風にあまた行みる君の庵

山に小雲をきて光にあそぶ時雨かり

九重に人もなく見えぬ時雨の跡

虫聲

何も聞き入の聞く人も鳴き時雨かな

梅もどき

こぼし種を枝の先にて付けるかな

葉にも色見えずに咲くも哀なり

蝶も寄りて見えしことのありかな

露こぼれ葉に散りて梅もどき

咲しくも見えぬ端にありかな

落葉

名にうつる自然の庭の落葉かな

落葉に風の吹くや枯木かな

水にうつる流れの落葉かな

蛙の葉にうつりて蔭すゞしさよ

宗山画賛

ふりしくもしらぬ物ハ葉にうつらぬ

霜かれ

霜枯やひとり枯ゆく姿なり

枯鮭

繁かなる雪降るも見ゆ枯鮭かな

色くろき顔にまけぬかれ鮭の顔

かれ鮭の人やおもしろくあはれなる

笑定

かれ尾花

枯尾花ゆかしく人にあはれなる　無人

ともかくも風にまかせてかれ尾花

大根引

あしの葉の大根にかはるやしあはせ大根引

鶯

降もなく鶯のなきかなし中の事

手に持てゆくる枯八ほしてゆく引

風

吹かへしやふくに葉の中の自

小春

御なまりのなき世の中しかく　小六自

紙衣　待宵も暇なきかさねかな
　　　原田やけしとさ

火燵　髪を結ふ手をひろげ時々まかせある

千香　あたりに風捨ひけりて香るかな

ふらふ山に寒きるふる香るかな

ふゆ里のしく影れ香る香るかな

吹きひかけくし宵ある香るかな

鴛鴦　おもふ人の影に雪のさきまさる

霙　冬の夜の雲より出る流し橋の霙

時雨れ　冬さて宵入見ぬともえぬ時雨るかな

寒き　朝の日の猫にうるさむたらかな

　　　山茶の口まで寒きくる浜の千

水仙　水仙の香やみ月はかるみの上

　　　水仙香るさくつ見ゆる寒さえける

冬の梅　冬の日の梅さく花もむしの梅にまつり

　　　折しるの日の梅やも冬の梅

初雪

初雪や[illegible]

初雪や[illegible]橋哉

はつ雪や[illegible]

はつ雪や[illegible]の人

初雪や麦の[illegible]

初雪や[illegible]

はつ雪や[illegible]

初雪や[illegible]の人

雪

初雪や風[illegible]

はつ雪や[illegible]竹の[illegible]

はつ雪や[illegible]

初雪や[illegible]の人

[illegible]雪

[illegible]雪

[illegible]竹の雪

[illegible]雪

まさし気の月に名のちりや升の雲

むら明り雲とかくやとさの雪

雪の降るものに笑ふ我も松の年

法名多さ八月のおに降りとさの雪

河内さつに

手我の降りや来る流し升の雲

河内さつに

とりかき落に[illegible]の降りさの雪

兵仙其我の見の降りとさの雪

岳陰遠等

朱来那堂

業も[illegible]も[illegible]つ[illegible]や[illegible]の[illegible]

山我に[illegible]の[illegible]や餘[illegible]

餘杵我名に升を辭[illegible]

撰八

撰八や流るるも物以の[illegible]

其松

[illegible]の降り宵[illegible]や[illegible]松

餅也　ちる者我持ハかなし餅於也
手の書　於手やもとにしき物をもちあり
見自於手の月もふるへ波手於書
納戸もひとつふと上手書ふあり
於手や重みいも於八那ふと何
未し於尾や柄ふ美ゆ弦ひあり
にし於内於美や多へふふ手於書
手内　之美
手於内於美や美く於ふ於も侍り

美しうまひし多那ふ美とやをしの内
十ヶ於も於以ゝつ於美於手於守る
美しさも多きに葉つゝひや悟しく於内
出もひ出し多飯ゝ那美那り手於内

追加

加陽千代女手

[illegible]し章

園の名の菊ゟ芳しき雪の雪　麦林

遠きからぬれるむしろ千代　千代

若草や雀の鶴静のきぬ　[illegible]

机の上のり戦気の猫　[illegible]二

栗柿の目のさ門の米しさ　東棠

霞にも人の下り来る遊ぶ鳥　乙渓

かりの縁の人[illegible]ある[illegible]し[illegible]　千代

花も大河横川ともに[illegible]　林二

灯[illegible]と[illegible]気[illegible]のき[illegible]　紫

根[illegible]の[illegible]も[illegible]かな　琴

紅も[illegible]しさの[illegible]掛　棠

集海

ちよ尼より麦林舎へ

忠作色しみ出かへし

粧ふ名おそ咲盛り貝見える

山吹や粧ひ手折も見えてお出

出ゆる名なし

絹ゑ出むや来かるの方ではえ

出ゆるもゐ我等咲れ

まゐおるし

水に見ゆる出てきて秋の風

出ゆる名なし

姑風を借りて萩のうらに取り

出ゆる名もしの好み

作者にて

麻沙の錦くれ深ら咲ゆ無俤

ゆかしさ孫と年経る

五月二十日

麦林

千代女

千代のみどりもとなり
岩こそあらね
きしの松も若葉の
かくの色のかげなり
蓮二

有としの花ざかり
千代のかげ(?)もまだ見えず
盧元坊

名の年や先人
五月も牧の笠

すゞ女の
月のほとり
涼風のふきこめし
蘇鉄の葉のかはり
すゞ女の絣(?)のけしき
紫周

髭多の子供(?)も
もやし庭の笠

蓮二より申来る

蓮生法師の古き様を謂ふには
春の山のかすみの一村変る色
とはいへ也花も霞も散るらむ
我か友なるへし小倉山の辺る人々も
まゝ出給ひて嵯峨の辺に住しし紅葉
のまゝも無きに桜にて雪のさまの有
も法体にし人俗の名を書付てたるらしく

久能に似や今に船来して西より何にか
まつくとの船の如くに何る蛾出つ船出か
来情とは見へすに乗て来るかゝるも
舟が出させ行なるときへる也

みつ書

蓮二

ふくえう画

書肆

淺草福井町一丁目

山崎屋清七

5年　2月

書肆
浅草福井町一丁目
山崎屋清七